

マスク考

－ 行動する「不安と恐怖」の関与シールド －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
真鍋拓司

近年、風邪や花粉症といった医療目的以外でマスクを使用している人々が注目され、「だてマスク」という言葉で称されている。

では、どのような他者が行為者にマスクを着けさせるのだろうか。マスクを装着した際の相互行為はどのように変化するのだろうか。そこで、「だてマスク」装着者4名に対するインタビュー調査を通して、ゴフマンの分析視角からマスク装着を巡って展開される相互行為過程を取り上げ、微視的なまなざしで詳細に分析・検討した。

その結果、4のマスクを装着することのある場所、10の使用法が摘出された。このような様々なマスク使用の中で4名のインタビュー協力者に共通するものが見られた。相互行為の中の非言語コミュニケーションの偏重である。自ら相手の言葉にならないメッセージを、時には架空のメッセージを読み取り、過剰に反応する。また、それを相手に求め、自らの言葉にできないメッセージを発信し続ける。そして、人間関係の中での不安や周りの目に対する恐怖を括弧に入れ、マスクというシールドに守られ、時には人を欺きながらも、それでも外に出て行動するという一定の方向性が見られた。

マスク装着者の、自らの置かれている環境に身を置きながらも、社会に出て、彼らなりの方略で挑む姿がリアリティを持って現れた。弱さと脆さを持ったものだったが、そこには決して受け身でない彼らの選択した生き方があった。